

本論文は、アルコールリズムその他の問題を抱えた人々自身による活動であるセルフヘルプ・グループについて、その活動が当事者たちにとっていかなる意味を持つものであるかを、そこで実践される自己物語構成の分析を通じて明らかにすることを目的としている。セルフヘルプ・グループに関する近年の社会学的研究は、当事者たちの発話行為に注目して、物語の共同体の生成とその構造的特性をさまざまに探求してきている。本論文はこれらの既存研究を踏まえた上で、アルコールリズムと死別体験の2グループにおける集会での参与観察とインタビュー調査を実施し、セルフヘルプ・グループにおける語りにおいては、既存研究が標準的なものとして提示している形式に従うことよりも、むしろそこからの乖離を意識した自発的な物語構成の方が重視されていることを詳述しながら、当事者たちにとっての意義を新しく解明したものである。

本文は全8章からなり、第1章で課題設定と調査方法を説明したあと、第2章は既存研究をレビューして、物語論的なアプローチの多くが、参加者は集団の物語を身につけ、集団に社会化されていくという受動的な側面を強調しすぎていると批判する。第3章では物語概念の基礎的な検討に立ち返り、人々の語りの構造を分析する枠組みとして、語り手自身による物語内の出来事への「評価」に着目したラボフ＝ワレツキー・モデルや、今日、セルフヘルプ・グループでの自己物語に関する標準的パラダイムともいえる、A.フランクの「回復の物語」が検討される。第4章では、セルフヘルプ・グループについての治療的言説が「回復の物語」としての性質を持っていると指摘し、第5章では、アルコールリズムのグループにおける自己物語構成では「転落と再生の物語」が主要な形態ではあるものの、「回復の物語」とは異なるいくつかの特徴があることを示す。第6章は死別体験のグループでの調査から、納得の調達やポジティブな生活態度への変化が容易ではないことが、むしろ強調されると指摘している。第7章において、これらの調査データをまとめて分析し、(1)自己物語が、経験から構成されると同時に経験を構成していくものであって、人生を創出する営みになっていること、(2)セルフヘルプ・グループに集まる人々は、治療の言説や「回復の物語」に生き難さを抱える人々であること、そして、(3)自己を語る人にとって、セルフヘルプ・グループにおける他の人々は単に「語りを受け止めてくれる」聞き手であるだけでなく、語り手の「人生の物語化」を促す積極的な存在である、という結論が導かれる。第8章は、本論文の全体を振り返って、今後の研究の展望を述べている。

本論文は、セルフヘルプ・グループにおける人々の語りと相互作用の構造を、参与観察等の詳細な一次データに基づいて分析し、既存のセルフヘルプ・グループ研究では見過ごされていた諸特徴を丁寧に浮き彫りにし、セルフヘルプ・グループの機能を、参加する当事者たちにとっての意味という観点から、新しくかつ説得的に提示している。データの分析のしかた、考察における論の運び方、そして結論等において、著者による独自の工夫と発見とが鮮やかにうかがわれ、この分野における研究水準を大きく進展させた、きわめて独創的で革新的な論考として高く評価することができる。

以上により、審査委員会は、本論文が博士(社会学)を授与するに値するものとの結論をえた。